

太宰府の文化財

291

竈門神社下宮礎石群

内山字御供屋谷

平安時代後期

最近、内山に所在する竈門神社へ参拝する人や、参拝の後に宝満山に登山する人が増えてきています。その竈門神社ですが、正式には下宮と言われる山と麓の集落との境界に作られたものであることを知っている人は多くはないでしょう。実は宝満山には山頂から麓まで順に、上から上宮、中宮、下宮と三方所に分かれて、お社（＝竈門神社）が存在していました。現在は宝満山山頂に上宮の社があります。中腹には中宮があった跡しか残っていません。また宝満山には神社しかなかったわけではありません。お寺もあったのです。

竈門神社は「続日本後紀」承和7年（840年）10月己酉（7日）条「正五位下

竈門神」を初出とする、京に知られた古社でした。それと同時に「扶桑略記」や「叡山大師伝」などをみると、延暦22年（803年）に、後に比叡山を開いた最澄が渡唐に際して、薬師佛を「竈門山寺」に奉納した記事が見られることなどから、平安時代の初め頃から神仏が混交し、山を中心とした巨大な宗教施設があったことが知られています。比叡山の第3代座主となる円仁の「入唐求法巡礼行記」には承和14年（847年）の記事で「大山寺」、「後拾遺往生伝上二」応徳3年（1086年）には「内山寺」として、「元亨釈書」仁治4年（1243年）には「有智山寺」と記録があり、名称の差異はあるものの大規模な寺院

が連綿と営まれていたことが文献に残っています。

さて、今回はその下宮の参道の脇にある下宮礎石群（以下、礎石群）について紹介したいと思います。礎石群は昭和35年（1960年）から翌年にかけて宝満山文化総合調査会（代表・西高辻信貞）の一環として九州大学名誉教授小田富士雄氏が調査したもので、地面の一部を掘ってみて、建物の基礎になる礎石が6列×8列（柱間5×7間）存在することを確認しました。その時の調査成果として、この礎石は整地土から出土した土器の年代観から平安時代後期に建てられたことと、元々はもつと古い建物が建っていた可能性を指摘されました。調査後は埋め戻されて、現在まで大切に保存されていました。

建てられた礎石建物ので、南北に長い5×7間、約23×約17mの規模であったことが確定できました。これにより太宰府では観世音寺講堂に次ぐ大きさを、古代の九州を代表する礎石建物であったことが、改めてわかりました。特別史跡の大宰府政庁跡のものと比較しても、礎石は遜色がないくらい大きく立派な加工がされています。50年の時を超えて再び注目される下宮礎石群ですが、現地では本物の礎石を見ることができず、そこで、竈門神社に参拝の際は、ぜひ参道右脇の礎石群まで足を運ばれてはいかがでしょうか。

文化財課 高橋 学



▲礎石建物の範囲（上が東）



▲柱座を持つ大型礎石

太宰府の文化財

(292)

市役所にある礎石

観世音寺一丁目

県道から市役所の玄関に向かっ
て石畳を歩いていく途中の右側
(西側)に、2個の礎石が置かれて
います。県道側(地図①)が水城東門跡
の礎石で、市役所側(地図②)が
国分尼寺跡の礎石です。



▲①水城東門跡の礎石



▲②国分尼寺跡の礎石

○水城東門跡の礎石

この礎石は、昭和43年(1968年)11月、福岡市水道工事の立会調査によって発見されたもので、発見地は国分二丁目16付近の旧道で、現地にある東門礎石の南東

23mくらいの場所にあたり
ます。礎石の大きさは126
cm×89cm、厚さは約25cmで、
表面には都府楼跡の礎石にみ
られるような円形に加工を施
した円形柱座があり、上面の
直径71〜77cm、高さ2〜4.5
cmを測ります。一部工事によ
って欠損していますが、どっ
しりとした立派な礎石です。
水城跡関係の礎石でこの加工
を施した礎石は、今のところ
この1個だけです。

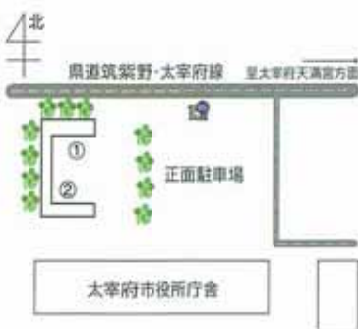
○国分尼寺跡の礎石

昭和33年(1958年)、
太宰府町役場が新築された時
に太宰府町内の人によって寄
贈されたものといわれ、一時
その行方が分からなくなって
いましたが、役場の庭を整備
していたところ再び発見され
たという礎石です。

この礎石がどこで出土した
ものかなど詳細な記録は現在
確認できていませんが、国分
尼寺があったと推定されてい
る国分共同利用施設の北側
(国分二丁目8付近)の田圃
で見つかったものではないか
といわれています。礎石の大
きさは80cm×67cmで、中央
に径32cm、高さ4cm程の円
形の造り出しがあります。こ
の造り出しは柱座にしては直
径が小さいことから、柱その
ものにこの造り出しが納まる
穴を削り込んで、柱を安定さ
せていたのかもしれない。

この2つの礎石は、今から
37年前の西日本新聞にも、
昔の役場入口の階段の両側に
置かれている様子が掲載され
ています。現在この2個の礎
石は、石畳に埋もれるように
置かれているため、市役所職
員でさえ気が付かない人も多
いようです。市民の皆さんは
都府楼跡や筑前国分寺跡など
で礎石を見る機会がたくさん
ありますが、他の市町村では
このような柱座を造り出した
礎石はあまり見ることはあり
ません。礎石を用いた古代の
建物が多かった太宰府ならで
はの光景であり、皆さんがこ
のような礎石に馴れっになっ
ているのも、太宰府という
土地柄かもしれません。この
ように当たり前すぎて忘れ去
られている文化財は、市内は
もちろん各家庭にまだまだた
くさんあることでしょう。

文化財課 宮崎 亮一



太宰府の文化財

293

太宰府の屋瓦おくが

梅の文様のある瓦

江戸時代の太宰府は「西府」「宰府」などと呼ばれ、天満宮の門前町を中心に小都市の観を呈していました。まちは天満宮に奉仕する社家といわれた僧侶や神官の屋敷や門前の旅宿、代官屋敷、商人や

職人の家屋敷が立ち並んでいました。この時代の絵図には天満宮を中心に切れ目のない家並みが五条のあたりまでびっしりと描かれています。建物の屋根は、茅葺きのものが多いようですが、瓦を用いた

ものも描かれています。このあたりの発掘調査では、たくさんの江戸時代の瓦が出土しています。中でも特徴的なのは天満宮の紋である「梅鉢文」と呼ばれる梅の花をデザインした文様の瓦があることです。

この瓦は、福岡地域でも太宰府天満宮を中心とする旧門前町付近からしか出土しない特殊な瓦です。この瓦は天満宮境内、連歌屋、馬場、五条

の現場で出土しており、神社だけでなく一般の民家の屋瓦としても使われていたことがわかります。

丸瓦は五弁の梅花の周りに幅のある円が囲む意匠で、平瓦は中心に五弁の梅花があり左右に唐草が広がる意匠を持っています。馬場遺跡や連歌屋遺跡で出土したものは18

世紀後半のものが最も古く、江戸時代の後半頃から制作され明治時代以降も使われたものだとわかりました。

江戸時代には日本各地で城下町を中心に都市化が進み、たびたび大火が起こるようになりました。このため都市部では城や神社以外の建物でも防火のために瓦を使用するよう奨励されました。江戸時代の太宰府のまちで独自の意匠の瓦がまち並みを飾っていたことは、大都市であった福岡や博多にもなかったことで特筆されることです。

平成18年度の調査でこの瓦が五条平井家で生産されて

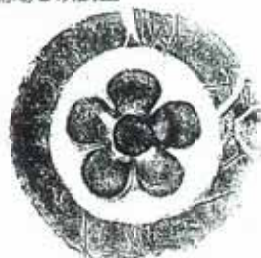


▲大藪善治氏邸に残る梅鉢文瓦

いたことがわかりました。平井家は昭和30年代まで瓦を生産していた家で、平井勝也氏宅では現在でも嘉永3年（1850年）の墨書がある軒平瓦の木型が制作道具とともに大切に保存されています。この瓦、実は現在でも五条から天満宮までの間の建物や外壁に見ることができ、五条の大藪善治邸築地壁、宰府四丁目の太宰府天満宮北の通用門、宰府二丁目旧定遠館築地壁、光明寺築地壁、石坂四丁目太郎左近社などです。江戸の瓦の文様探しに出かけてみてはいかがでしょう。

文化財課 山村 信榮

馬場8次調査



桑坊224次調査



▲遺跡から出土した梅鉢文瓦



▲平井家所蔵の嘉永三年銘のある軒平瓦の木型

太宰府の文化財

(294)

神無月

くカンワタシ・カンモドシく

旧暦の10月のことを、古来「神無月（かんなづき）」と言います。神様がこの地になくなる月ということを表現して、このように呼称されています。どこへ行っておられるのでしょうか。日本で唯一、この月のことを「神在月」とする場所があります。それは出雲大社がある旧出雲の国です。1年に一度、全国の八百万の神々が出雲に会し、人々の縁結びの相談をされるという伝承が残されており、現在の10月の終わりに「神在祭（神迎祭）」が行われ、11月の末に「神送祭」が行われます。一方その他の地域では、逆に10月の終わりに「神送祭（神渡し・神送り）」が、11月の終わりに「神迎祭（神戻し）」の行事が行われています。

太宰府でも太宰府天満宮・

王城神社の2社を除く各お宮で神送祭と神迎祭が行われていました。旧出雲国を除く地域で行われる神送祭・神迎祭は、「縁結び」の相談に神々が行かれることもあり、祭りに関わる人々は青年が主体であつたようです。ここ太宰府市では、多くは子供たち（小学校3年生く中学生）の行事として執り行われ、青年たちはお手伝いであつたと言われています。少々「云われ」の変容が起きていたことが分かります。出雲の国に話を戻すと、この神々が出雲の国に集う伝承は、平安時代の記録「奥義抄」に残されており、江戸時代末期には神々の相談の風景が絵に残されるなど、広く知られていたようです。

太宰府では、いつ頃から始まったのかについて定かにできませんが、祭事を行っていた

方々のご記憶をたどると、30年く40年前を境に途絶えていったようです。

この神送り（カンワタシ）、神戻し（カンモドシ）の行事は、市内では復興された坂本八幡宮以外では見ることができません。

お隣の佐賀県基山町では、今でも子供たちの行事として、「こもったき」の呼称のもと続けられていきます。時は11月下旬ということですので、「神迎祭（神戻し）」のみが行われていることとなります。中学2年生を頭に、小学生を従え、皆で火焚きの穴を掘ります。そこで燃やす木々は近在の山から子供たちの手で集め、祭りのときの食べ物も区内の家々を廻って子供たちが集めてきます。その行為を通して、上下の関係を学び、相互信頼が育っているようです。

そういえば、1年の

疲れを癒しに湯殿につかり、多くのヘドロ・廃棄物を洗い流してくれた少女に対して、龍神さまを「良きかなくつ」と言わしめたアニメ映画がありました。この物語は、自然界を汚した人間の所業を表

現した物語であると同時に、この神送祭によつて出雲大社へ行かれた八百万の神々が、1年の御苦労を癒されているお姿を描いたものであつたともいえます。

文化財課 中島恒次郎



▲佐賀県基山町の「こもったき」の行事（基山町教育委員会提供）

太宰府の文化財

(295)

唐式鏡

9世紀頃 大佐野4丁目

太宰府西小学校・西中学校
 一帯は、東に大宰府を遠望す
 る丘陵地で、大宰府官人の奥
 津城として知られる宮ノ本遺
 跡があります。ここでは奈良
 平安時代にかけての墓が数



▲唐式鏡

十基確認され、買地券が見つ
 かった宮ノ本1号墓が有名で
 す。

この1号墓の近くには、ほ
 かに2基の墓が並んでいまし
 た。そのうちの1つ、宮ノ本

3号墓から
 は、木棺に使
 われたたくさ
 んの釘とも
 に黒色土器の
 椀と鏡の破片
 が出土してい
 ます。鏡の周



▲黒色土器の椀

りには漆膜があったことか
 ら、鏡は漆箱に入っていたと
 考えられています。

この墓が造られた時期は、
 出土した黒色土器の考古学的
 年代観から推定されます。黒
 色土器とは、その表面を細い
 へら工具を使って丁寧に磨い
 た上に、その名のとおり黒く
 いぶして仕上げた素焼きの土
 器で、漆器のように黒光りす
 るのが特徴です。この土器か
 ら、墓が9世紀中頃から後半
 に造られたことが伺えます。
 この器は死者に供えられたも
 のを入れていたのでしょうか。
 鏡は破片ですが、当時の輝
 きを一部にとどめる見事なも
 のです。厚さは4.6〜6.5ミリ、
 直径20.9センチほどに復原さ



▲宮ノ本3号墓

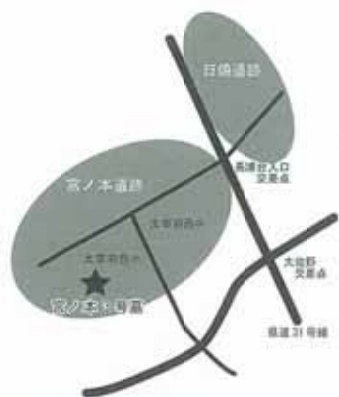
れます。白銅製で90・2グ
 ラムもあり、持つとずしりと
 重く感じます。鏡背面は、
 三条の凸線による円によって
 内区と外区に分けられ、そこ
 に細い線による文様が表現さ
 れています。内区には鳥の文
 様などが、外区は二葉をもつ
 花の文様が描かれており、ま
 た花部分と鳥の尾部分は五つ
 の珠文で表されています。

この鏡は、破片の状態にし
 て副葬されたもののようで
 す。鏡に限らず、ものを割つ
 て副葬する例はあり、土器の
 口縁を打ち欠いた例はよく知
 られています。この墓が造ら
 れた平安時代前半には、大宰
 府周辺や肥前国府周辺など
 で、鏡や陶磁器などの貴重品

を破片で副葬する例がみられ
 るようで、大宰府に関係した
 当時の役人たちの葬送儀礼に
 共通するのではないかと考
 えられています。

なお、この鏡の類例は今の
 ところ知られていません。こ
 のため製作地など特定でき
 ませんが、おそらく中国で
 作られたもので、文様の特徴
 から製作年代は唐代の後半頃
 と想定されています。作られ
 てまもなく、海を渡って大宰
 府へもたらされたのでしょ
 う。大宰府の国際性を裏付け
 る貴重な資料として、現在、
 九州国立博物館に展示されて
 います。

文化財課 井上信正



太宰府の文化財

296

火鉢

連歌屋遺跡出土 鎌倉時代

最近暖冬傾向のため、あまり冬の厳しさを感じませんが、ほんの数十年前までは太宰府でも一冬に何度かはまとまった積雪があるのは当たり前でした。おじいさんおばあさんに昔のお話を聞かせてもらっても当時の冬は「今より寒かったなあ」というお話を聞くことが多いです。現在の世の中はエアコンやファンヒーター、果ては床暖房と冬の寒さに対しても充分な対応がなされていますが、昔の人はどうやって対処していたのでしょうか。

その答えの一つがこの瓦質火鉢です。この火鉢は、太宰府天満宮の西側に隣接する連歌屋遺跡から出土したものです。出土した土師器皿の年代観からこの火鉢は13世紀中

後半、つまり鎌倉時代に使用されていたものと考えられます。口径は42cm、器高15.75cm、底径32.7cmで、二つの脚がついていました。外面は磨いて綺麗にしており、口縁部近くに連続して菊花文のスタンプが施されているのが特徴的です。火舎・火桶・火櫃・手焙りなどとも呼ばれます。さて、この土器の使い方ですが、この中に灰を入れて炭を燃やしていました。屋内で運搬が可能な火の安置場所という意味で、画期的なものだったと思われまます。現代でいえば移動式ヒーターでしょうか。

この火鉢を主な暖房器具にして中世以降、江戸時代までは暖を取っていました。ただし、どこからでも出るものではなく、大きな屋敷やお寺な

どに関係する遺跡から出ることが多いため、使われ出した当初は、庶民の家などで使われるものではなく貴族や武家、寺社関係で使われた貴重なものだったと思われます。後に時代が下ってくると出現地点も増えることから一般にも普及していったことが分かります。

昨今、このような昔ながらの火鉢の人氣が高まっていると聞きます。他の暖房器具に無い風情があるからでしょうか。正月の三が日などしんと降り積もる雪を雪見障子越しに観ながら、火鉢に当たる…。そういった日本の風景も次の世代に伝えていきたいものです。

文化財課 高橋 学



▲火鉢

太宰府の文化財

(297)

弥生土器・甕かめ

（弥生時代前期）

前田遺跡出土（向佐野）

左の写真は、佐野土地区画整理事業に伴なう発掘調査で出土した弥生土器のうちの1点です。

弥生時代は、おおよそ紀元前3世紀*から紀元後3世紀ごろで、大陸から朝鮮半島を

經由して稲作農耕文化が伝えられ、発展した時代です。弥生土器には、煮炊きをするた

めの甕、液体などを貯蔵するための甕、食べ物を盛り付けたりする高坏などがあります。写真の土器は、そのうち



▲弥生土器 甕（高さ23.8cm）



▲刻み目



片が、こうしてひとつの土器からも読み取ることができます。この土器が出土した前田遺跡は、弥生時代前期の住居跡や

*弥生時代の開始年代については、紀元前10〜3世紀まで諸説あります。

文化財課 遠藤 茜

の甕です。底は平らで、胴部は直線的に立ち上がり、口がゆるやかに外へ開いています。内側には指でなでた痕、外側は刷毛目という工具でな

でた痕があり、表面を整えています。口の部分は指でつまんでなでていて、よく見ると、口の端には縦に刻み目が付けられています。このような形の土器に、考古学では板付式という型式名を付けています。板付式は、弥生時代を前期・中期・後期と大きく3つの時期に分けたとき、前期にあ

る土器型式で、本市を含め北部九州一带に分布します。写真の土器を見て、他にも

分かることがあります。土器の外側に真つ黒な斑点があります。これは土器を焼く時に付いたもので、横に倒して置いて焼いたようです。また、上半分が全体的に少し黒っぽくなっています。これはこの甕を使っていた時に付いたもので、下半分を土に埋めて、周りで火を焚いて調理に使っていたと考えられます。二千年以上前の人々の暮らしの断片が、こうしてひとつの土器からも読み取ることができます。

貯蔵穴が多く見つかった集落跡です。同じ頃の遺跡として、板付式の名のもとにもなった福岡市博多区の板付遺跡があります。板付遺跡は、弥生時代の初めに大陸から伝えられた稲作農耕を福岡平野でいち早く行っていた集落の遺跡です。同じように、この甕を作り使っていた前田遺跡の人たちも、稲作をして暮らしていたと想定されます。

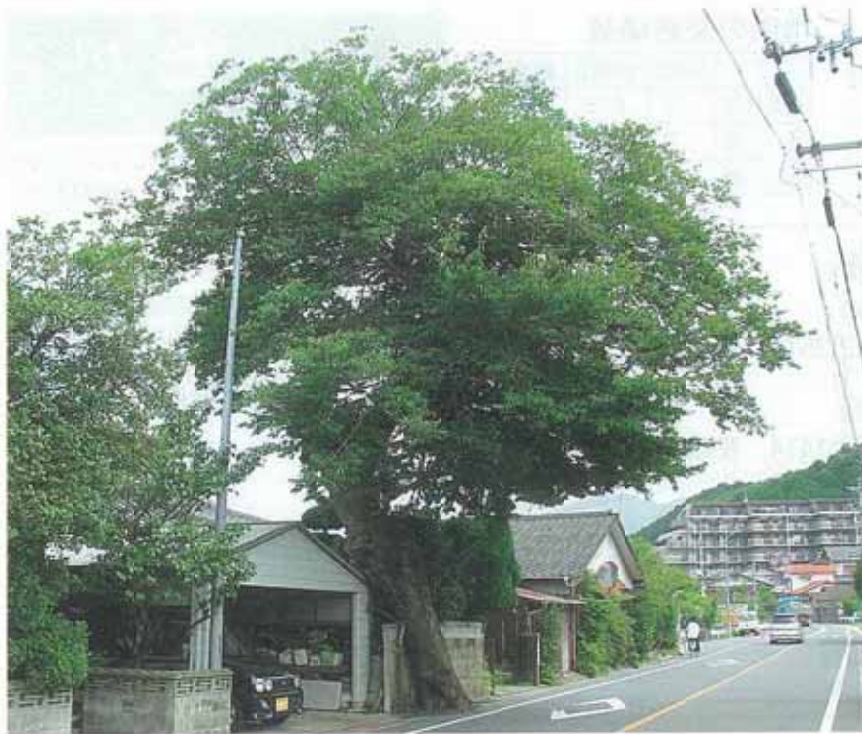
本市にも稲作農耕文化が伝わっていたことを示す貴重な資料のひとつです。

太宰府の文化財

298

ムクノキと棕ノ木茶屋

宰府五丁目



太宰府天満宮の西側の県道を宇美町方面に進んでいくと、双葉老人ホームの手前に大きなムクノキがあります。このムクノキは、高さ7.7m、幹回り3.3mの大木で、根元には小さな空洞があり、その中に高さ26cmの小さな板碑が祀られています。

以前このムクノキの横には、お八重さんが営む棕ノ木茶屋というお店がありました。建物は瓦葺で、表の道路から見ると平屋建てでしたが、裏手の土地が一段低く、それに合わせるように建物も造られていたため、御笠川から見ると2階建てになっていました。このムクノキはお店のちょうど真ん中にあり、その両側に入口がありました。下へ降りて行くと裏の御笠川へ出ることもできました。

棕ノ木茶屋を利用する人中には、宇美町や志免町に当時あった炭鉱で働く人々も多かったようです。店の内部は座敷があつて、うどんや梅ヶ枝餅、トコロテンやラムネなどが売られていました。すぐ

後ろには幸ノ元井堰から小鳥居小路に続く溝が流れ、昔はその溝の水でラムネなどを冷やしてあつたそうです。冷蔵庫がない当時は、アイスクリームはありませんでしたが、夏場にはカキ氷があつたようです。

また、近くの双葉老人ホームの場所には、昭和18年から戦後すぐまで双葉山相撲錬成道場があつて、横綱双葉山も一時期住居を構えていたため、横綱双葉山をはじめ、力士の出入りもありました。もしかして店の出入口にあるこのムクノキを双葉山たちはポンポンと大きな手で叩いていたかもしれません。

終戦後、茶屋は太宰府天満宮の東神苑に移転しました。屋号も変えることになり、大きな檻に入れられた鶴が、茶屋の前にいたことから鶴見茶屋としました。現在は九州国立博物館へのエスカレーターができて、その茶屋もありません。

現在ムクノキの根元はアスファルトで固められ、横を車

がどンドン通り、排ガスを浴びせられるという何とも窮屈そうなムクノキですが、茶屋や県道を往来した人々の思い出が詰まった大切な木なのです。

文化財課 宮崎亮一



▲ムクノキの根元の板碑



太宰府の文化財

299

三條のナンジャモンジャの木

宰府三丁目

4月下旬頃、太宰府天満宮横の県道を北上していくと上田さん宅の片隅に真っ白な花

を咲かせた木が見え、県道を通る人々の目を引き付けます。この木のことを太宰府の



人は「三條のナンジャモンジャの木」とか「三條のヒトツバタゴ」と言っています。

今から40年程前、大正・昭和と活躍した太宰府在住の書家、古賀井卿さん(1891~1982年)が、太宰府天満宮の境内に住んでいた頃、長崎県対馬の鰐浦にある神社(本宮神社)の幟旗を2枚書きました。その後、そのお礼にと対馬にちなんだ岩田石の硯と高さ1~2m程の細く小さな苗木を2本頂きました。古賀井卿さんはその苗木1本を自分の娘夫婦の上田さんに託しました。それが現在見ることのできるナンジャモンジャの木です。

ナンジャモンジャの木とは通称で、正式にはヒトツバタゴと言います。ヒトツバタゴは、モクセイ科の落葉高木で、この三條のヒトツバタ

ゴの故郷である長崎県対馬鰐浦の自生地は国内最大規模のもので、海岸沿いの樹木には白い花が咲き満ちて入江を照らすことから「ウミテラシ」とも呼ばれ、国指定天然記念物になっています。

上田さんがヒトツバタゴをもらった頃は、それがどのよな木でどんな花が咲くかも分からず、玄関先に恵比寿様がちようどあったことから、その横にでも植えて置くことになりました。そして10年ほど経って白い花が咲いたものの、その後しばらくは近所の人たちと「何の花だろう」と話していました。当時の太宰府の人にとって、まさに「なんじゃもんじゃ」の木だったようです。現在根元の周囲は0.95mにもなり、根元付近で二又に分かれた幹は、大きく直径5m程に枝を広げ、その高さは65mにもなっています。上田さんは、まさかあの親指ほどの太さだった小さな木が、このように大きくなるとは思わなかったそうです。

ここのヒトツバタゴは葉っぱが開く前に花が咲き、花が終わった葉が開きます。それで見事な純白の輝きを見ることができのです。花は開花時には緑色ですが、浅葱色から黄色、そして真っ白に変化し10日程経つと一気に散るそうです。近年は横の県道の交通量が多いためでしょうか、以前より咲き方が悪くなっているそうです。

書家古賀井卿さんが書いた文字は、太宰府天満宮飛梅前の「飛梅」の文字や菖蒲池横の大きな万葉歌碑など近隣各所の石碑に見ることが出来ますが、その活躍の恩恵を私たちは意外な形で感じることが出来ます。

文化財課 宮崎亮一



太宰府の文化財

300

大宰府の屋瓦やがわら 平井の文字がある瓦

太宰府では古くから瓦が出土することで知られ、江戸時代の旅行記にも都府楼跡（大宰府政庁跡）で瓦が散乱している様子が記録されています。当時の好事家たちはそれを求めて、和歌を彫り込んだり、硯に作り替えるなどして古風を楽しんでいたようです。それらの瓦の中で文字が押された瓦があることが知られており、明治時代にはその研究も行われました。文字は瓦の外面に格子模様のスタンプで押された中にあり、解りやすいものでは「観世音寺」や「安楽寺」（現在の太宰府天満宮）など納品した施設の名前が記されたものや、「天延3年（975年）」など制作された年が刻まれたものがあります。しかし、それ以外にも「佐伯」「賀茂」「平井」など、人名と考えられる文字瓦が存在します。これらは大宰府政庁を問わず、宝満山か

ら大宰府条坊跡、筑紫野市、福岡市域に至るまで平安時代の数多くの遺跡で出土し、普遍的に使用されていた瓦だといふことが判ってきました。

平成17年度に調査した西鉄二日市駅近くの大宰府条坊跡第271次調査では、丘の斜面に築かれた瓦窯跡が見つかりました。この窯は瓦を焼いている途中で天井が崩落して、そのまま放置された状態だったため、窯の中にたくさん焼けた瓦が残されていました。この瓦の中に「平井」と記されたスタンプを押したものが数多く含まれています。整理の途中ですが、どうもここでの文字瓦は「平井」の名前の入った4種類のみで、他の種類は無いようです。

実はこのほかに太宰府市内で見つかった瓦窯にも同じような傾向があります。坂本の松倉瓦窯、米木北瓦窯では「佐」（佐伯の佐か）、蔵司

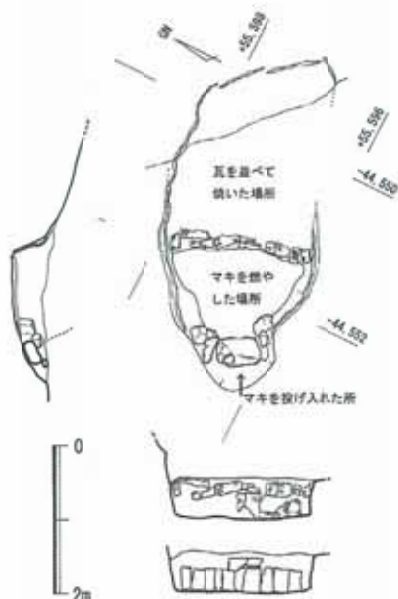
近くの都府楼北瓦窯では「賀茂」の文字瓦が集中して出ています。このことからこの人名と思われる文字は瓦造りに従事した家の名であって、平安時代にはこれらの瓦師はそれぞれ、または共同で窯を経営していたことが想像されます。観世音寺の古い記録では寺に専属の瓦師がいたことが知られ、おそらく安楽寺も寺の管轄係として専属の瓦師がいたのではないかと考えられます。それに対して家の名前を記した瓦工場の主は、寺院や役所に対して自立的な経営であったことが考えられます。「大宰府」銘の瓦が出土しないのも、大宰府がこれら工房から個別に瓦を調達していたことによるのかもしれない。

この平井氏は中世には鋳物師として文献に登場する平井家といわれ、その末裔は昭和30年代まで五条で瓦工房を経営していました（広報平成21年10月号参照）。太宰府における歴史のつながりの深さが感じられる一例です。

文化財課 山村 信榮



▲「平井」銘の瓦



燃料が燃える場所と瓦を焼べた場所の境に段があり、燃れないように瓦を粘土で埋めて固めていました。

▲構造



▲条坊跡第271次の瓦窯跡